

# 研究報告書

学校名 沖縄県立久米島高等学校

**I 研究主題** SDGs 達成の資質能力を育む課題解決型「まちづくりプロジェクト」  
～小中高と繋がる SDGs 達成への取組を通じた育成～

## II 主題設定の理由

ポスト SDGs が議論されるなか、日本は 2023 年の SDGs 達成度ランキングで 21 位と年々順位を下げており、世界的な調査でも「精神的な幸福を実感しにくい社会になっている」とされ、「社会的つながりやセーフティネットが希薄なために悩みや苦しみを個人や家族だけで解決するしか」なく、「他者により厳しくなってしまうという悪循環が透けてくる」（高橋 2021）と指摘されている。急激な人口減少と高齢化によって課題先進国とされる日本だが、久米島町においても人口減少と高齢化は深刻であり、毎年約 100 名が島を離れていく現状がある。そのなかで久米島町では小学校から久米島の課題に取り組む授業があり、本校では「まちづくりプロジェクト」として、町の協力を得ながら久米島町の課題解決に取り組む探究学習を行っている。この探究学習に SDGs の視点を取り入れることで自らの課題として取り組み、久米島町を持続可能な地域にするための担い手を育成できると考え、本主題を設定した。

## III 研究実践の主な内容

### 1 研究方針

総合的な探究の時間を通して地域の課題解決に向けて取り組むことで、SDGs 達成に取り組む意識を育み、生涯にわたる自己の課題として捉えさせ、進路活動に繋げる。

### 2 研究組織

校長、教頭、総探担当、学年団（1, 2 学年主任、1, 2 年担任・副担任）

### 3 研究内容

- (1) まちづくりプロジェクトにおいて、持続可能な社会にするために必要なことは何かという問題意識のもと、課題を SDGs17 の目標にあてはめ、探究活動を進める。
- (2) まちづくりプロジェクトの活動や振り返りを通して、自分に何ができるのかを考えさせることで、自分なりの課題意識を持たせ、進路活動に繋げさせる。
- (3) 1 年生のインターンシップにおいて SDGs の視点で企業研究や振り返りを行い、次年度のまちづくりプロジェクトに向けて課題発見に取り組む。

### 4 研究実践

#### (1) まちづくりプロジェクト（対象：普通科 2 年生）

##### ① 各分野の講師によるそれぞれの課題等に関する講義（5 月）

生徒のあげた課題で多かったのが経済、出産、観光であったため、久米島在住の起業家や助産師、観光協会の方々を講師として招き、久米島の現状を学んだ。生徒たちは課題解決に向けた考えが安易であったことや急を要する久米島の現状を実感できた。

##### ② 課題設定、研究計画書（5～7 月）

「久米島で幸せに暮らすためには何が必要か」というテーマのもと、自分なりの課題を一人一人検討し、それを解決することがどの SDGs のゴール達成に関わるのかを考えた。そこから同じ問題意識を持つ生徒同士で3～4人のグループになり、教師は1人2グループを担当して指導に当たった。さまざまな思考ツールを提示して探究学習における課題設定の仕方を指導し、グループで取り組む課題の設定に取り組ませたが、グループによっては課題設定がなかなかできないグループもあった。そのため中間発表に向けた研究計画書を作成する際、使用する思考ツールを「KWL」「5W1H」「3つの軸」に絞って使い方を説明し、課題や仮説の立て方を再度指導した。7月に研究計画書を提出させ、夏休みに計画書の再考や調査活動が実施できるよう、学年主任と目を通したうえでアドバイスをを行い、SDGsの視点がもり込まれている「第2次久米島町総合計画 後期基本計画・第2次久米島町総合戦略」から該当する箇所を添付して返却した。

### ③ 町役場の職員を中心に外部人材を審査員とする中間発表（10月）

企画財政課、商工観光課、久米島DMO、島ぐらしコンシェルジュの方々を審査員として招き、二つの教室に分かれて研究計画を発表した。各分野の専門家から現状や実現可能性も含めて質問やご指摘をいただき、生徒たちは緊張しながらも一生懸命答えていた。中間発表を通して、生徒たちは計画書に足りなかったところや改善するところ気づくことができ、今後の調査活動に何が必要なのかを検討することができた。

### ④ インタビューやアンケートなどの調査活動（10～1月）

研究計画書をもとに、それぞれのグループがインタビューやアンケートを実施して実態調査を行った。（写真1）

インタビューを行うことで課題や仮説の設定を見直したり、思うようにアンケートが取れなかったりするなか、メンバーとの協働作業がうまくいかないグループも出始め、生徒たちは悩みながらも試行錯誤して活動を進めていた。そのなかでも具体的に進んでいた2グループを本研究の予算を活用して本島に派遣し、沖縄観光コンベンションビューローの方に直接インタビューを行った。



写真1

その際に、保養や「何もしないこと」を目的とした観光が増えている今、宮古・八重山ほど栄えてはいないが、コンビニエンスストアなど最低限のものはそろっている久米島は「ちょうどいい」ところで、ポテンシャルが高いと教えてもらい、久米島は課題しかないと思っていた生徒たちは、地元で自信が持てたのと同時に視野が広がった。後日、他の生徒たちにも共有するために、全体に向けて報告会を行った。

実態調査で集めた資料や情報をもとに分析し、課題解決のための手立てを考える際、それぞれの課題に対応する169のターゲットを示した。該当するターゲットについて久米島町ではどうなっているのかを指標にすることで、客観的な根拠になることを指導した。しかし最新データを入手できなかったり、提案やまとめに繋げられなかったりして、うまく活用することができなかった。

### ⑤ 学習発表会（2月）

本校の「魅力化プロジェクト」に携わる方々や中間発表の審査員、民間の方などを審査員として招き、学習発表会を行った。全校生徒の前で一年間取り組んできたことをパワーポイントにまとめて発表し、審査員からの質疑に一生懸命答えていた。効果的に相手に伝えるためにはどう工夫できたか、ということが少なからず審査に影響しており、発表後の反省で自分たちの取り組みや提案をきちんと伝えることができていたのかを

反省点としてあげているグループもあった。

## ⑥ 活動の反省、自らの課題と進路を繋いだマイプロジェクトの決定（2月）

まちづくりプロジェクトの取り組みに対する反省点や成長したこと、心の変化、SDGsの達成に対する意識の変化、まちづくりプロジェクトを通して将来取り組みたいと思った課題、未来に向けてのマイプロジェクトをそれぞれまとめた。生徒が成長したこと(表1)として「考える力」が最も多く、次いで「課題発見」「協調性」が続いた。

SDGs 達成に対する意識の変化については、まちづくりプロジェクトを始める前と後では変化した生徒が36人中27人、変わらないと答えた生徒が8人であった。また、まちづくりプロジェクトで取り組んだ課題を今後のマイプロジェクトとした生徒は36人中23人おり、課題とは関係せずとも、将来とSDGsの課題を結びつけている生徒も8人いた。

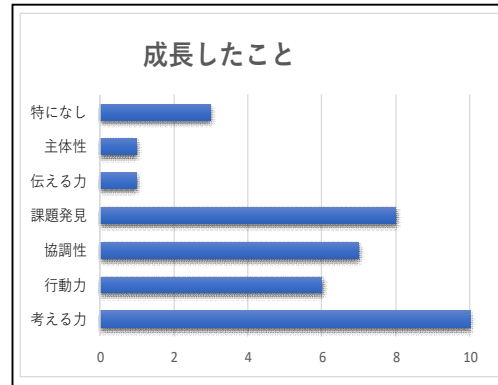


表1

### (1) インターンシップ（対象：1年生）

#### ① SDGs との関わりについて、受け入れ先の企業を研究

県立総合教育センターの我如古主事の助言をもとに、受け入れ先の事業先や仕事がSDGs達成にどう関わるのかを考え、職業体験に取り組んだ。

#### ② 学年発表会にて代表を選び、全体の学習発表会で発表

担任・副担任の先生方を審査員として学年発表会を実施し、上位8グループが学習発表会で発表した。生徒たちは各事業所で行っている仕事内容や取り組みがどのSDGs17のゴールに関わるのかを分析し、自分なりの考えをまとめた。

#### ③ インターンシップでの経験や2年生の発表をふまえ課題の設定

インターンシップを終えて、久米島に住む今「こうしたい」と思うことは何か、自分の理想に近づくためには何が必要かをまとめ、次年度自分が取り組みたい課題を考えさせた。そのなかでインターンシップでの経験をふまえた課題を設定した生徒は半分であった。また2年生が学習発表会で提示した課題や提案を引き継いだ具体的な課題設定と大まかなグループ分けまでを行うことが出来た。（写真2）

写真2



## 5 その他

連携型中高一貫教育を行っている本校では、連携型入試において久米島町の課題に取り組むことをテーマとするプレゼンテーションを課しており、昨年度からSDGsの視点で分析することを指定している。小学校や中学校で取り組んだ課題と高校のまちづくりプロジェクトを繋ぐことは、探究学習を小中高と系統的に深化させられるため、今後検討する必要がある。

## IV 研究実践の成果と課題

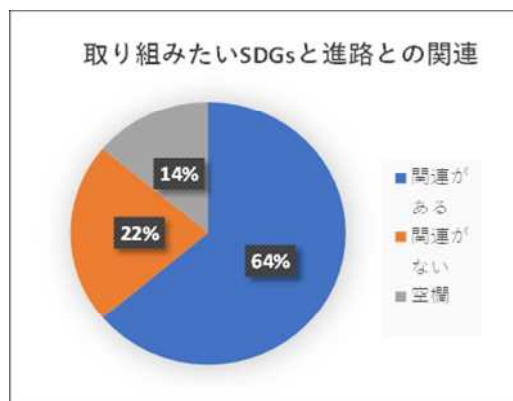
### 1 成果

#### (1) まちづくりプロジェクト

新見・前田（2009）「小中高生を対象にしたキャリア意識尺度の作成」において作成されたキャリア意識尺度を参考に「基礎的・汎用的能力」の項目に則って整理

したアンケートを作成した。毎学期の調査で生徒のキャリア意識の変化を確認したところ4つの能力すべてにおいて低下が見られた。ただ一人一人を分析すると、探究学習を進めるなかでそれぞれがぶつかった課題等に対応している部分があり、取り組むなかで体験したり考えたりした結果が反映されたと考えられる。既述のように発表会終了後のアンケートでは、成長したことや心の変化については前向きな感想も多く、SDGs達成に対する意識の変化としては「身近なものだと感じた」「自分に出来ることをしていると思った」などの意見のほかに、「理解が深まったからこそ達成の難しさを感じた」という意見もあり、SDGs達成に取り組むことを実感として捉えられていることがうかがえる。また取り組んだ課題と直結した進路先を希望する生徒は19人おり、86%の生徒が何らかのかたちでSDGs達成と関連させて進路を考えている様子が見えた。（表2）

以上のことより、SDGsの視点を持って身近な課題に取り組むことで、SDGsの課題をより具体的に自分事として捉え、将来にわたって取り組もうとする姿勢を育む指導に有効であることがわかった。また教師側としても、SDGsを指標とすることで課題設定におけるアドバイスや探究学習の指導のイメージがしやすくなり、まちづくりプロジェクトを持続的な活動にしていけると考えられる。



## (2) インターンシップ

限られた事業所で中学生から就業体験をしている生徒にとって、SDGsの視点をいれることで新たな気づきに繋がり、学習が深められたと考えられる。生徒からも「SDGsと関連付けて考えることで見えてくる課題があると気づいた」という意見があった。また学習発表会の直後に反省や次年度の準備をしたことで、スムーズに課題とSDGsを関連させることができ、2年生が課題設定したときよりも具体的な課題を提案することができた。

## 2 課題

本研究を通して、地域の課題解決をテーマにした探究学習を指導する際には、バックキャストの考え方やSDGs169のターゲットを用いた分析の仕方を、教師側が理解を深めて指導することで、より客観的で主体的な活動にできるのではないかと感じた。ESD教育の視点に立った探究学習の進め方や指導法についてきちんと理解し、先生方と共有できなかったことは反省点である。また、生徒自らの進路に結びつける活動にはもう少し時間が必要であった。今回は生徒の記述にコメントをすることで対応したが、取り組んできた課題が自身のキャリアにどう繋がるのかを教師が丁寧に指導し、生徒に意識させることで、キャリア意識の向上に繋がれたのではないかと考えられる。そのため、今年度のように1年生からまちづくりプロジェクトを始めて研究期間が確保できるよう、計画を見直す必要がある。今後は本研究で得た探究学習の進め方や課題をまとめ、体系化していくことが大きな課題である。

## V 主な参考文献

- ・高橋真樹『日本のSDGs それってほんとにサステイナブル?』大月書店 2021年
- ・新見直子・前田健一 2009「小中高生を対象にしたキャリア意識尺度の作成」『キャリア教育研究』
- ・川延昌弘編「わたしからはじまる!SDGs」風鳴舎 2022年